

下田歌子先生のこと

童門冬二

下田歌子先生は安政元(1854)年8月8日に、現岐阜県恵那市岩村に生まれました。生家は藩(松平家)の儒者でした。父は平尾録蔵、母は房、そして歌子先生は銆といいました。明治3(1870)年に父録蔵が、明治新政府の神祇官宣教掛使に任ぜられて上京し、翌春、後を追って銆が上京。引き続き一家をあげて東京に出ました。宮内省の御用掛・八田知紀に和歌の教えを受けていた歌子先生は、明治5(1872)年10月、推挙されて宮中に出仕し、女官として皇后陛下(後の昭憲皇太后)に仕えます。下田先生の和歌の才能を愛でられた皇后陛下が、「これからは歌子となのるように」と仰せられ、銆の名を改めました。才女の名が高く、「明治の紫式部」などと呼ぶ人もいました。その後下田猛雄と結婚し、明治12年11月には宮中を辞しましたが、周囲から望まれて自宅に「桃天学校」を開設し、政府高官や華族の子女の教育に当たりました。

夫の死後、再び宮内省に入り、華族女学校(学習院)が開校されると教授になりました。この間に、欧米の女子教育を視察するためにヨーロッパに渡っています。

明治31(1898)年に「帝国婦人協会」を結成、その付属として、翌年「実践女学校(実践女子大学の淵源)」を開設しました。そして清国(このころの中国の国名)からの女子留学生を、積極的に受けいれました。

桃天学校時代には、明治5(1872)年に日本からアメリカに留学した5人の女子留学生のうち最年少(当時8歳)の津田梅子が明治15年に帰国してきたので、英語の教授陣に加えています。歌子先生は、梅子に英語の指導を頼むかわりに、梅子に国語と習字を教えました。少女時代をアメリカですごした梅子は、英語は得意でしたが日本語が十分ではなかったのです。穴をワナ、柳をウナギといていたそうです。とくに手紙の中で使う「候」という字の意味と用字法がわからなくて、何度も歌子先生にしつこく質問したそうです。歌子先生の説明を英語でノートをとったといわれています。

歌子先生のめざしたことは、日本における女性の地位向上です。そのための女性の教養の高まりです。しかもそのことを「日本女性のよさを失わずに実行する」という、しとやかさとやさしさ、温かさを大切にする、というものでした。その志はいまも香りを失わずに、実践女子学園やふるさと恵那市だけでなく、さまざまところで引きつがれています。

童門冬二●どうもん・ふゆじ 作家。1927年東京生まれ。東京都庁に勤め広報室長、企画調整局長等を歴任した後、退職、作家活動に入る。組織と人間の関係を中心テーマに、歴史から現代を読み解き、人間の生き方や考え方を問いかける小説や評論、講演活動を行なう。『小説上杉鷹山』『小説細井平洲』『異聞新撰組』『銭屋五兵衛と冒険者たち』『明治天皇の生涯』『内村鑑三の「代表的日本人」』『歴史のおしえ』『二宮尊徳の経営学』など著書は500冊以上。